

暮らしを支えるみなとの情報誌

Vol.98 December 2021

港湾

12

月号

特集

港湾インフラシステム海外展開の
新たな戦略

特別寄稿

中米パナマで考える
日本のインフラ輸出への期待
駐パナマ特命全権大使
大脇 崇



公益社団法人日本港湾協会
The Ports and Harbours Association of Japan

室津と北前船

風を防ぐごと室のごとし

日本遺産「北前船」の港といっても様々な港の風景があります。近代以降の時代の変化と共にオシャレに生まれ変わった観光地の港町。逆にのどかな漁港でしょうか。昔の港町の痕跡さえ見つけるのも難しい開発・埋め立てられた大きな港町などでしょうか。

室津のある瀬戸内海は、畿内に隣接し沿岸部が東西に長い播磨地方にあります。古来より多くの津々浦々が古くから港町として存在していました。古代に編纂された『播磨国風土記』には「風を防ぐごと室のごとし」と登場します。つまり、その港は部屋のように風があたらない良港であるというわけです。その良港ぶりが如実に表現されています。

以来、室津は本播磨平野が育んだ産物や人々の労働力を、海路をとおして広範囲に運び、様々な物資を海路から播磨にもたらしてきた湊として歴史を紡いできました。北前船により活発な廻船活動が展開する以前から、室津は畿内・瀬戸内海の、つまりは日本の政治・経済の中心地の玄関口としての役割を果たしてきたのです。

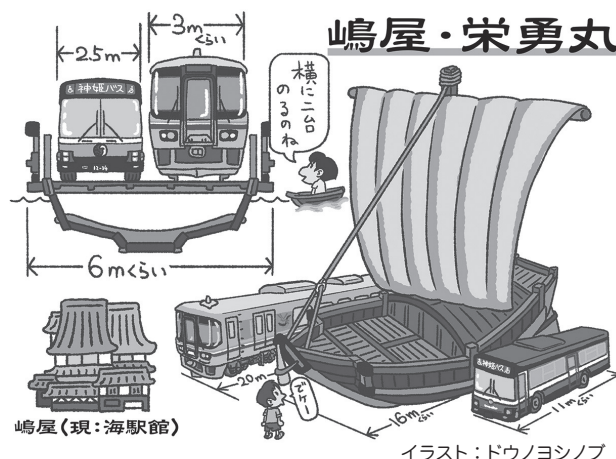


天然の良港、室津を空から望む

室津入津干鰯の流通

室津の港町の長い歴史のうち、北前船の海運の発展のなか、より多く運ばれた物資に肥料があります。畿内先進地における綿作の増大に加え、18世紀に入り商品生産・商業的農業の進展により魚肥の需要が増加します。室津をはじめ瀬戸内の廻船活動はこの需要に強く反応していきます。

綿作の魚肥として主に使用されていたのは干鰯です。干鰯は西播磨では極めて早い時期から施用されていたとされています。室津は薩摩藩を通じて干鰯を仕入れており、干鰯流通の窓口の一つでした。また、室津の廻船がこの時期に北陸の鯨を取り扱っており、



嶋屋の北前船「栄勇丸」

それを周辺の富裕層が買入れ肥料として耕作地（耕作人）に配っていたことが推測されるのです。

姫路藩の藩政改革もあり商圏の拡大が見られます。それは播磨平野の特産である木綿・長束木綿の産地が広がっていくことが影響していました。木綿の産地が姫路城下から加東・加西に拡大していくにつれ室津の廻船活動は、生産力の高い播磨平野を後背地として展開していきます。廻船活動で取引される商品は地域の農業を刺激し在来農業に影響を与えていきます。廻船活動の「交易」が「公益」となっていくのです。北前船がこの地に与えた影響の一つではないでしょうか。

室津と北前船

室津宮ノ下の船頭善兵衛が延宝8年（1680）に「きたまえ上り、壱わり半之利足二相定借用」（薩摩屋文書）とあることから、船頭善兵衛が薩摩屋からのお金を借用し北国へ商売に出向く様子がうかがえます。また、享保21年（1736）に多量の加賀米が室津に入港しており、北前船によって運ばれた可能性があります。このように、室津の船が早くから北国の商品を取り扱っていたことが推測されますが、西回り海運が本格的な展開を見せるようになると、各地の客船帳等の資料でも播磨の活発な廻船活動が見られるようになります。石見国浜田の客船帳によると、宝暦・明和期以降に播磨の船の入港数が増えており、浜田に室津の船が明和期4回、安永期に3回見られます。また、塩を売って干鰯を買入れていることもわかります。

18世紀後半には越後出雲崎に室津の船が入港し11人の船主の名が見られます。さらに、19世紀初頭には、室津の船である明神丸、住徳丸が古手荷物を出羽酒田まで運んでいることが知られています。この時期、室津の船が奥州まで及んでいたことがうかがえます。

また、廻船活動の他に他国の廻船がもたらした荷物の買い取りや依頼を受けて販売する営業も行っていたことが知られています。廻船問屋の中でも著名な越前河野浦の廻船問屋右近権太郎宛に送った年頭の挨拶状には、「相変わらず御荷物御用向仰せ付け下されたき」旨を依頼していることが記されており、弘化3年（1846）の例でみると、鯉荷物を大阪・兵庫・室津に運び、室津では、ヤケシリ粕・モンベツ粕・白子を「舟商内」。別に筒鯉を「揚置」し、嶋屋に委託販売しています。

「嶋屋」の廻船活動と船頭たち

他国の客船帳等から室津の廻船活動を見ることができますが、地元室津に残された資料はごくわずかです。そのわずかな資料も、廻船問屋「嶋屋」（現室津海駅館。日本遺産構成文化財）の改修の際に発見された襖の下張りに使われていた紙片であります。まとまった資料とは言えませんが、各地の客船帳と照合して嶋屋の活動を整理すると

- 請取は天保9年（1838）から明治4年（1871）までの34年間にわたる。
- 船は下関を廻り佐渡を経由、松前・江差に至るか、酒田止まりもあった。加賀・越前辺りもあった。
- この間、嶋屋の船は、松前に13回、江差に5回行っている。うち2回は松前・江差両方へ入港している。干鰯屋伊三郎の船も江差へ1回行っている。

など、断片的ではありますが、室津の廻船が北海道から西回り航路で長期にわたり活動していたことがわかります。「嶋屋」の廻船活動を示す紙片は商売の領収書であり明細書の類ですが、「一航海千両」と言われた船主たちの活動を生々しく今に伝えてくれます。

活発な廻船活動を行っていた嶋屋ですが、江戸時代後半の嶋屋の船頭について記した越前三国港の資料があります。船頭文蔵は、事情があつて越前三国湊の内田家が5、6年前に嶋屋半四郎に貸していたといいま



「嶋屋」三木半四郎が奉納した石仏（日本遺産構成文化財）

す。文蔵の父が難破により死んだので文蔵を返して、代わりに四郎兵衛が嶋屋に遣わされました。北前船は買積を行う商船ですから、儲けは船頭の才覚によるところが多く、有能な船頭を雇うことも廻

船問屋としては重要なことでした。文蔵は明治2年に再び嶋屋の船頭に戻っていることから、有能な船頭であったのでしょう。どのような経緯でこの文蔵が雇われ越後から播磨へやってきたのかはわかりませんが、北前船などの廻船が寄港する港と港においてネットワークが形成されていたことは容易に想像できます。当然そのネットワークは物資の流通のみならずそれに携わる人々をも巻き込んだものであったことでしょう。

津々浦々の歴史を伝える

室津の周辺の港湾部は近代化のなか埋め立てられ日本屈指の工場群が並び立つ工業地帯となりました。室津のようにのどかな雰囲気と共に歴史的景観が残る港は数少なくなりました。その景観は近代以降も著名な作家や画家が訪れるなど多くの人を魅了してきました。そのことは単に景観が優れているということだけでなく、眼前に広がる景色の向こうに悠久の歴史を感じることができるからではないでしょうか。

先祖代々の土地を守ってきた庄屋や地主がいるような平野部と違い、廻船などの商売で成り立つ港町の栄華は浮き沈みが激しく、資料の残りが少ないと言われています。

日本遺産の認定については、観光行政の性格が多分にありますが、そこに描かれ刻まれたストーリーにはそれぞれの地域の歴史・文化が必ず盛り込まれています。それらに触れ次代へ伝えることは大切なことで、地域の歴史遺産を伝えていくには、研究・専門機関や研究者だけでなく地域住民の方々と一緒になって共有し守っていく必要があります。

これからの歴史遺産は、地域活動や経済活動の基盤となります。その一翼を担っていくものとして新しい活用法を多くの人々とその価値を共有しながら考えていければいいですね。



室津賀茂神社から見た瀬戸内海
江戸時代シーボルトが絶賛した風景が今も見られる